

平成22年 5月19日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820022

研究課題名（和文） アントニオ・カンピとカトリック改革期の美術

研究課題名（英文） Antonio Campi and arts in the age of Catholic Reformation

研究代表者

大野 陽子 (OHNO YOKO)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：80512938

研究成果の概要（和文）：

初年度の現地調査の結果、アントニオ・カンピ作品のうちミラノのサンタンジェロ聖堂ガッララーティ礼拝堂とミラノ近郊の巡礼地インヴェリゴの聖堂の作品に研究を絞ることとなった。前者はミラノ北辺の聖カテリーナ巡礼地への注文者の崇敬に結びついていると判明し、後者とともにカトリック改革期における巡礼地と美術の関係、民衆的信仰心により生まれたイメージの排除と残存の問題という更なる研究テーマへ繋がった。画家の制作背景に関する研究の一環として外国支配下にあった16世紀のミラノにおける外来の芸術家と地元画家の軋轢を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

As the results of the research in Italy in 2008, it is clarified that the dedication of Gallarati chapel at St' Angelo Church in Milan to Saint Catherine was related to the veneration of Gallarati family to the sanctuary of this saint. Besides this, the research about another sanctuary at Inverigo, near Milan leads to the other problematic of the relation between the art and pilgrimage in the age, and censorship and survive of images rooted in popular piety in the age of Catholic Reform. And it is examined the conflict between milanese local artists and "forestiero (foreigner)" artists at Milan in late sixteenth century under French or Spanish domination; in the context a contemporary Milanese critic wrote the very severe sarcasm about Campi's works at Gallarati chapel.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,320,000	396,000	1,716,000
2009 年度	1,150,000	345,000	1,495,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,470,000	741,000	3,211,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：美術史、アントニオ・カンピ、北イタリア、カトリック改革、巡礼地、民衆の信心

1. 研究開始当初の背景

(1) ミラノ近郊の小都市クレモナの画家一族に生まれたアントニオ・カンピは、先行研究においてカンピー族あるいは兄弟のひとりとして扱われる傾向が強く、彼個人に関するモノグラフ研究が必要とされる。

(2) R.ロンギによる論考以来、アントニオを含むカンピ兄弟は北イタリアで16世紀に活躍した画家たちとともにプレ・カラヴァッジョ派として理解され、近年ロンバルディアで開かれた二つの展覧会でもロンギのテーゼが踏襲されており、本研究で取り上げるアントニオ作品についてはそれ以上の掘り下げがなされない。

(3) 1980年代からは、プロテスタンティズムの盛んなアルプス以北の地域と境を接する同地域で活動した画家たちの作品は、同時代の宗教文学の影響、信徒による宗教画像の受容様態に着目した社会史的研究や図像学解釈の対象とされるようになり、カンピ兄弟の作品についても近年、同時代的コンテクストに照合して解釈され始めた。しかしながら、アントニオの作品のなかには掘り下げの必要と思われる作品がある。

2. 研究の目的

本研究は、イタリア北部ロンバルディア地方で活動した画家アントニオ・カンピ作品のうち、1560年代からミラノ近郊で制作された諸作品（特にミラノ、サンタンジェロ聖堂ガッララーティ礼拝堂装飾《聖カテリーナ伝》、インヴェリーゴの《園での祈り》、ブレラ美術館所蔵《聖会話》、サン・パオロ・コンヴェルソ《聖ヨハネの斬首》）の制作背景、図像の意味、受容状況を明らかにし、個別の作品研究を通して、16世紀後半のカトリック改革下における芸術の機能、民衆の信仰心と美術の関係、芸術制作と受容との相互補完的関係を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究調査と目している作品に直接関連する先行研究資料が日本国内では入手困難であることから、研究はイタリアでの作品調査および史資料収集（1ヶ月）と、国内での資料精読、調査結果の分析、考察とを繰り返すというかたちで進めていく。作品の現地調査と同時代史料の収集、それらの分析、精読に基づき、社会史的、図像解釈学的アプローチを行

う。研究の進展具合によって確実に成果の出る作品に関する調査を優先的に行う。

(2) 研究初年度である20年度は、北イタリア美術の知見を深め、アントニオ・カンピ作品史を押さえ、研究の枠組みを作り、研究対象と目しているカンピの作品に関する研究を平行して進め、それぞれの研究の可能性を見極めた。

イタリアでの調査の準備とその後の考察として、カンピ作品に関する先行研究、カンピと彼に影響を与えたマニエリスム期の画家や北イタリアで活動したプレ・カラヴァッジョ派の画家たちの作品を概観し北イタリア美術に関して、先行研究を把握し、画像を集める。また研究を予定している作品の主題の図像例を収集し、図像伝統を詳細に把握する。

20年度のイタリアでの調査では、クレモナ時代に遡って未見のアントニオ・カンピ作品を実見し、様式的な変遷を体系的に把握することに努めるとともに、写真撮影を行い、作品の現状確認をとる。

(クレモナ：大聖堂、サンタ・マルゲリータ聖堂、サンティラーリオ聖堂、サン・ピエトロ・アル・ポー聖堂、サン・シジスモンド聖堂、市立美術館。ミラノ：サンタ・マリア・プレッツ・サン・チェルソ聖堂、サン・マルコ聖堂、サンタンジェロ聖堂、ブレラ美術館、大司教絵画館。インヴェリーゴ：サンタ・マリア・デッラ・ノーチェ聖堂。) ミラノ、ロンバルディア美術史研究所、ブレラ図書館、芸術図書館、トリブルツィアーナ図書館、インヴェリーゴ市立図書館において、カンピに関する先行研究資料と、同時代資料を収集する。また、ミラノ大学のジュリオ・ボーラ氏、ロッサーナ・サッキ氏らロンバルディア美術研究者と面談し、研究の可能性の検討を行う。

(3) 21年度には、前年度に収集した文献資料の精読と画像の分析、考察を行い、アントニオ・カンピの全作品カタログの祖型を作る。文献資料、画像資料の整理とデータ化のため学生アルバイトを雇用した。

前年度の現地調査の結果から、21年度の調査対象を研究可能性の高いミラノ、サンタンジェロ聖堂ガッララーティ礼拝堂装飾《聖カテリーナ伝》、インヴェリーゴの《園での祈り》の2作品に絞る。

前者については、ガッララーティ家関係の資料をミラノ、ブレラ図書館およびミラノ国立古文書館で調査する。また、同作品に対してカンピの同時代人からの批評、カンピが活動していた16世紀後半のミラノの美術環境に関する先行研究資料をミラノ、ブレラ図書館、ロンバルディア美術史研究所で収集する。

インヴェリゴの《園での祈り》については、同作品が現在設置されているインヴェリゴのサンタ・マリア・デッラ・ノーチェ巡礼地の由来、聖堂創建の歴史、1570年代における聖堂改築、神学校活動に関する同時代史料調査、1571年および1582年のカルロ・ボッロメオによる巡察記録をミラノ国立古文書館、ミラノ市立図書館で収集する。また、20世紀初頭に行われたサンタ・マリア・デッラ・ノーチェ聖堂の修復記録をミラノ市立古文書館で収集する。

ジェッサータ教区聖堂、メーダ教区聖堂でアントニオ・カンピ作品を実見し、現状を把握、写真撮影を行う。

作品実見を基に、ミラノ大司教絵画館の《園での祈り》や同時代にジュリオ・カンピ、ペテルザーノ（アンブロジーナ絵画館）、ロマッツォ、フィジーノ（サンタ・マリア・デッラ・パッションネ）らが描いた同主題作品との比較検討を行う。

国内では、イタリア調査で収集したインヴェリゴのサンタ・マリア・デッラ・ノーチェ聖堂のラテン語資料の読解をすすめ、修復記録から16世紀の聖堂の状態の再構成を試みる。

4. 研究成果

(1) 初年度のミラノでの調査によって、研究対象と予定していた作品群のうち、ブレラ美術館所蔵の《聖家族》、サン・パオロ・コンヴェルソ《聖ヨハネの斬首》については研究遂行の実現性が低いことが判明した。前者については、同作品が本来設置されていたサン・バルナバ聖堂の記録を渉猟するが、注文主、制作に関する記録が乏しく、ミラノ大学のジュリオ・ポーラ教授の助言もあり、今回の研究期間内での調査は断念した。後者についても現在、作品の実見が容易ではないことから、研究対象から外した。研究可能性の高い2作品ミラノのサンタンジェロ聖堂ガッララーティ礼拝堂とミラノ近郊インヴェリゴのサンタ・マリア・デッラ・ノーチェ聖堂の作品に関する実地調査と文献調査を勧めることとする。

(2) 20年度はミラノ、サンタンジェロ聖堂ガッララーティ礼拝堂の成立と絵画制作の事情に関する調査を行う。それにより、同礼拝堂の装飾計画がミラノ北部のサンタ・カテリーナ巡礼地との結びつきによるものだと判明した。21年度の再調査、上記ガッララーティ礼拝堂のカンピ作品に関するミラノ古文書館での調査を続行する。さらに注文者の子孫が所蔵している関連資料の調査を企画するが、同アーカイブは現在非公開であり、研究が困難となった。ただし、初年度の調査で明らかとなった巡礼地への崇敬に由来する礼拝堂装飾という事例に見られる巡礼と民衆の信仰心と美術との関係というテーマは、2010年採択の若手研究Bでさらに個別に掘り下げる予定である。

(3) インヴェリゴの巡礼地サンタ・マリア・デッラ・ノーチェ聖堂の作品「園での祈り」に関連する調査の結果、本作品がミラノ大司教の意向で16世紀後半に同聖堂に設置されたという従来の説は検討の余地があることが判明した。作品設置に関する問題を明らかにするには、インヴェリゴの巡礼地をとりまく同時代状況に関するさらなる調査が必要とされる。巡礼地に関する調査は、2010年採択の若手研究Bの研究に結びついた。

(4) 国内調査では、個別の作品研究と同時に、アントニオ・カンピの活動環境に着目し、ことに外国支配下のミラノにおける、地元画家とカンピのような外来の芸術家の軋轢の歴史を論じた。アントニオのミラノにおける代表作の注文者も外来のパトロンであることを考えると、地元／外来の間の軋轢は芸術家間だけでなく、パトロンも含めた問題として検討すべき課題となろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

大野陽子「16世紀のミラノにおける芸術環境」『交差するアートメディア』大阪大学グローバルCOEプログラム、コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点、2007-2009年度報告書、2010年、60-75頁。査読なし、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 陽子 (OHNO YOKO)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：80512938